
ちょっとだけ違う御伽噺

国高ユウチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちよつとだけ違う御伽噺

【Nコード】

N2433Y

【作者名】

国高ユウチ

【あらすじ】

基本的に主人公溺愛です。話によっては逆ハーもあります。聞いたことがあるけど少しだけ違う展開の御伽噺たちです。

私と赤頭巾（前書き）

* 短編の私と赤頭巾と同じ内容です。

私と赤頭巾

私は森の一匹狼。

比喻表現などではなく、森で暮らす一匹の狼だ。

銀色に輝く毛並みは自慢の一つで、鋭い牙もふさふさとした尻尾も、強固な爪も手入れを欠かしたことはない。

しかしながら誠に残念なことに、自慢の種も、武器として扱うべく牙と爪も役に立つことはほとんどない。

何故なら私はベジタリアンで、特に木になっている果物や、茂みに生えている野菜を好んで食べるからだ。

生粋の狼であればまた違うのだろうが、私は人狼と呼ばれる種族で、別に肉を食べなきゃ困ることもない。

生まれた森から世界を見たいと飛び出たのは、まだ狼から人型にならない幼い頃だ。

もう両親の記憶もおぼろげで、故郷への帰り道も判らない。

それでも紆余曲折を得て辿り着いたこの森は、私にとって楽園とは言えなくても、十分に住み心地がいい場所だった。

——一点を除いては。

今日も今日とて食事を終えた私が、枝振りがいい木の上で昼寝をしていたところ、鬱陶しい気配が近付いてきた。

動物的本能は人間よりも鋭いので、足音は遥か前から聞こえている。頭部にある三角の耳をぴくぴくと動かし両手で塞ぐと、やがてくる『災い』から身を守るために小さくなって葉に紛れるように隠れる。これだけ枝振りがいい木の、しかも天辺付近にいるなら見つかるまい。

そう思いながら器用に寝返りを打つと、どしんと嫌な震動が身体を

貫いた。

「な、何事だ!？」

「あ、やっぱここにいたー! おっはよー、狼さん! 今日も遊びに来たよー!」

「!?!?」

眼下から聞こえる声に、嫌な汗が額から滲む。

恐る恐る枝の隙間から下を覗けば、小麦色の肌をしてムキムキマツチヨな体を白のタンクトップで覆った男が、好青年さながらの笑顔を浮かべてこちらを見上げていた。

結構距離があるのに、視線が絡んだと感じたのは絶対に間違いじゃない。

一瞬で全身に鳥肌が立ち、ビビビビッと尻尾の毛が逆立った。

「——貴様、赤頭巾!？」

「そう、俺だよー! もう、太陽が上がってからずつと探しちゃったじゃないか。また住処を変えたの? 狼なのに木の上で寝るなんて珍しいね」

「貴様が私の寢床に毎日襲撃するから住めなくなるんだろうが! って言うか、その斧を止める! 木が倒れるだろ!」

「あはは、倒すために斧を使ってるんだよ。俺じゃそこまで上れないし、そうなる君に降りてきてもらうしかないだろ?」

「降りるのは嫌だ!」

「そう言うと思ったから、手っ取り早く切り倒してるんだ。俺って用意周到だからね」

きらりと白い歯を輝かせて告げた男に、旋律が走った。

この森に来て初めて会ったのは、不似合いな赤頭巾を被るよく判らない感性の子供だった。

狼にしかねなかった頃に餌や寝床を与えてくれた少年は、きこりの祖父母と暮らしていた。

祖父母の反対を押し切ってまで毎日毎日仲良しの友達として扱ってくれていたのに、ある日私が人に変化できると知ってから徐々に態度が変わり始めた。

どう変わったのかわからないが、どこかが変わってしまったのだ。

人狼の一族は人間に変化できるようになれば一人前だ。

だから私は与えられるだけの生活ではなく、自活すべく彼の家を飛び出したのだが、赤頭巾を被る少年は、赤頭巾を被る青年になっても未だに私を追いかけてくる。

森のどこに逃げても必ず見つけ出し、どこまでもどこまでも、追いかけてきた。

「どこに行っても無駄だよ、狼さん。君は俺のものだって、俺が拾ってからずっと決めてるんだから」

ずずん、と木が倒れた音がして、目の前が土煙で視界が遮られる。それでも何とか持ち前の身体能力を活かしてバランスを整えて着地する体勢を取ると、ぽすりと何かに受け止められた。

「ほら、捕まえた」

酷く満足そうな声に顔を上げれば、至近距離にいつの間にか随分と大人びた顔がのぞきこんできた。

こげ茶色の瞳が眇められ、私の頭に頬を摺り寄せる。

狼でしかなかった頃からと全く変わらぬ親愛の表現に嘆息すると、今日も掴まってしまったかと、私は一つため息を落とした。

私と赤頭巾（後書き）

*狼・・・石橋を叩いて壊すタイプの慎重派でありながら、突如として猪突猛進に突っ走るタイプ。

珍しい人狼と呼ばれる種族の子供であり、人狼しか住まない森から好奇心で抜け出して旅をしていた。

悪運が強いので生き延びで、なんとか安息の地を見つけるが、最近 は安息の地も穏やかじゃない。

見た目：小さくて華奢。しかし狼なのでその気になれば強いし、身体能力もいい。銀色の毛並みとふさふさの尻尾が自慢。

*赤頭巾：おなかの空き過ぎで行き倒れていた狼を拾った。両親はなく、祖父母に育てられていた。祖父の職業がきこりで、現在は彼もきこりをしている。

なので力持ちで身体もかなり小麦色の肌のマッチョになっていた。森の奥深くで隠者のような生活をしてるため、友達も居ない。そこで現れた狼を友達として大切にしていたが、狼が人の女の子にもなれると知って溺愛の意味が変わってしまった。

最近では彼女との追いかけっこが密かな楽しみ。

見た目は爽やかな青年だが、中身は割りとSっけが強く構いたがりの寂しがり。

人魚王子と女王様

「陛下、こちらの書類の内容は」

「うむ、一両日中に決議する」

「陛下、大臣が至急お会いしたいと」

「・・・内容を吟味した上で必要があれば予定に組み込め」

「陛下」

陛下、陛下と呼ばれる都度返事をしながらも、書類を読み、決裁する手は止めたりしない。

何しろ私は女王様。

父も母も亡くなってから、小国とは言え一国を纏める立場にある。

一日二十四時間じゃ足りないくらいだ。むしろ二十四時間働き続けたい。

それでも終わらないくらいの仕事がどんどん回ってくるので、自然と動かす手も早くなる。

毎日毎日こつこつこつこつ仕事をしていたらいつしかスキルも上がっていて、有能な女王として近隣諸国にも名が届くほどになった。

ちなみに態々そんな情報を収集する暇はないので、私が自分から調べたわけではない。

各地に根付かせた草から纏めた情報を一手に纏める、我が有能なる宰相が自慢げに告げた世間話の一つだ。

他国では男性を重鎮に据える場合が多いらしいが、私の国では力を使う戦闘部隊こそ7：3で男性の割合が高いが、他は8：2で女性が官吏として務めていた。

女性は感情で動くと言われがちだが、女性ほど強かになれる生き物もない。

それが今は亡き母が口癖のように教えてくれた言葉だったけど、女王の立場についてしみじみとそう思う。

己の価値を知る助成ならではの手腕で各地の草は忠誠を誓う女王のために働き、寝物語として聞くささやかでありながら重要なそれは小国である自分の国を守るには丁度よかった。

お陰で海と山に囲まれて豊かな土地を持つわが国は、海の幸山の幸の恩恵にあずかり今日も長閑に過ぎている。

あとは有能な後継者を作るべく、よりよき伴侶を見つけるだけなのだが――。

「おい」

「・・・・・・・・」

「離れてくれないか、人魚王子殿。いい加減鬱陶しい」

「・・・・・・・・」

自慢の豊かな黒髪を、ずっと弄っていた男に視線を向ける。

両手に海で取れた珊瑚や真珠で作った髪飾りを持った彼は、太陽を紡いだような金色の髪と、彼の故郷を思わせるマリンドールの瞳を満足気に細めた。

人の姿になるために声を失った彼と会話するためには、私が彼の口の動きを読むしかない。

波打つ豪華な金髪を右側で一本に結った彼――人魚王子は、私の視線を独り占めできたのが嬉しいのか、両手を広げてきゅっと抱きついてきた。

彼との出会いは、もう二年ほど前になる。

私が所要で他国に出かける際に船に乗って海を渡ろうとしたところ、急な嵐にあって海に落ちたところを助けられた。

薄れゆく意識の中、半身が人間、半身が魚という物語の中でしか聞いたことがないような生き物が、必死に唇を噛み締めて海上に連れ出してくれたのを覚えている。

一夜明けて浜辺に打ち上げられた私は、前日の嵐が嘘のように晴れ渡る太陽を最初に見て、彼は夢の中の人物だろうと思った。しかしどっこい、現実はその甘くない。

『——お目覚めかい、可愛い人の子』

垂れ目がちな瞳をうつとりと細めた彼は、浅瀬に下半身をつけてこちらをじつと見ていた。

男の癖に、女の私より遙かに色気ある視線に、じとりと眉間に皺が寄る。

町にいたらいかにも女の子に囲われてそうな色男だ。

甘ったるいテノールの声は、滑らかでもっと聞きたくなるほどの美声だった。

マリンブルーの瞳をとろりと蕩けさせ、砂浜に肘をついてこちらを眺める彼は、心底楽しそうに微笑んでいた。

とりあえず助けてもらった礼として持ち合わせていた指輪を渡したところ、嬉しげに瞳を輝かせた人魚は、両手でそれを包み込むように持つと海へと帰っていった。

その後捜索隊として出ていた騎士団の団長（男）が、血相を変えて私を探しに来て、お姫様抱っこで城まで連れて帰られたのは、今ではいい思い出・・・いや、今でも恥ずかしい思い出だ。

確実に黒歴史のページに刻み込まれている。

それから一年が経ち、月に一度の浜辺の散歩中に、ふらりと歩く素っ裸の男と遭遇した。

気色ばんで奇声を上げた過保護な騎士団長は私の目を両手で塞いだ。が、こちらを向いた顔は見覚えのあるもので、とりあえず彼のマン

トを貸すように命令して着たのを確認してからそつと手をどけた。心底嬉しそうに私を見て微笑を浮かべる男は、あの日私を助けた人魚だが、足は人間のものになっていた。

話を聞こうにも声は出ず、筆談しようにも文字が判らない。

仕方なしに唯一共通の言葉を読むべく唇の動きを解読したところ、話の内容はこうだった。

『声と引き換えに人間にしてもらったんだ。これからはずっと一緒だよ』

相変わらず蕩けそうな笑顔でそう告げると、彼は私を腕に抱き、即効で騎士団長に沈められた。

それから彼の身の上話を聞いて整理すると、こうだ。

彼は人魚が住む国の末っ子の王子で、嵐の夜に海に落ちた私を見て一目惚れしたらしい。

必死に助けて陸に送り届けてからも、一言言葉を交わしたいとずっと朝まで待ち続け、私から礼のつもりで渡した指輪を婚約指輪と勘違いして、一族の説得のために一年を要して勝利をもぎ取り、その後魔女の元に行くと声フェチな彼女に頼み声と引き換えに人間の身体を手に入れた。

腹心の部下である宰相と騎士団長、さらに宮廷魔術師長も話を聞いていたが、幼馴染の宰相と宮廷魔術師長は大爆笑し、騎士団長の顔はかなり引きつっていた。

蕩けるような笑顔を浮かべた人魚王子は、今日も今日とて私の傍で生活している。

元は王子であっても人間としては位がない彼だけれど、この国の女

王は一妻多夫制なので、その気になれば結婚できた。

対外的には身分ある相手を選ぶばいいだけだし、何より彼は、この恋が実らなければ海の泡へと消えてしまうらしい。

話して聞かせる時点で脅しだと怒り狂った騎士団長の言葉に頷く他にやりようがないが、聞いてしまったからには命の恩人を見殺しには出来ない。

「——貴様、陛下から離れる！」

「・・・・・・・・」

今日も今日とて罵声と共に、長閑な一日は過ぎていく。

この状況を楽しむ幼馴染夫妻を恨めしげに見詰めながら、それを楽しんでいる自分に、深くて重いため息を吐き出した。

人魚王子と女王様（後書き）

* 女王様・・・小国の女王様。努力型の頑張り屋。最近は適齡期なので見合い話も増えているが、面倒で受けていない。というか、人魚王子や騎士団長に邪魔をされている。見た目は黒髪黒目の、きりりとした顔立ちのどちらかと言えば童顔な娘。それでもスタイルはいい。

* 人魚王子・・・フェロモン垂れ流し型の垂れ目色男。人魚界では浮名を流す色男で何事も退廃的な男だったが、女王様に一目惚れして一途な男に転進。自慢だった声や、身分も何もかも捨てて恋に生きている。現在は命の恩人の立場を最大限に活かして女王様の執事のような仕事をしている。

* 騎士団長・・・女王様にほの字の堅物。一途で、彼女に剣を捧げた頃から十年以上の片恋をしている。突然現れた人魚王子に仰天しつつも、ライバルの登場に焦って、奪われたくないと初めて動くことを決意した。一妻多夫制のこの国の制度を理解してるので、彼女の隣に立てるようになるべく努力中。

* 宰相と魔術師長夫婦・・・二人は女王様と幼馴染。二人とも女王様を妹のように可愛がっていて、騎士団長と人魚王子のやりとりを楽しみつつも、若干騎士団長を応援気味。理由は人魚王子は何もせずとも進むけど、騎士団長はつかないと前に進まないから。

私とアリス

「忙しい、忙しい！」

首から提げた大きな懐中時計の秒針を確認しつつ、私は猛ダッシュする。

腰に届く白い髪が風に靡き、相反する黒い耳がピコピコ揺れた。ずれかけたモノクルを指先で押し戻すと、再び風を切って走る。

黒の執事服の裾がぴらぴらと揺れ、それが尻尾に擦れてほんの少しだけくすぐつたい。

次に仕立て屋を呼ぶ時はもう少し短くすると頭の中のスケジュール帳に書き込んでいると、どんと横から衝撃が走った。

「やあ！今日も元気に走り回ってるんだね、可愛い僕のウサギさん！」

ぎゅぎゅうと自分を抱きしめる相手に、はんなりと眉間に皺が寄る。

こうしている間にもスケジュールは押している。

いつだって手帳と時計を片手に走り回っている私をよく知っているのに、この襲撃者は毎度毎度遠慮というものがなかった。

「アリス！手を離してください！私には女王陛下のために働いているんです。あなたとの会話の予定は一分一秒も取り入れておりません。完璧なスケジュールにひびが入ります！」

「えー？いいじゃない、僕とウサギさんの仲なんだから」

「敢えて言うなら、知り合い以上友人未満の関係です。親しくもないのにみだらに女性に触れるのは無作法です！」

「えー！？僕の中では恋人以上婚約者未満だよ！？」

「――っ」

あまりにもありえない発言をあっさりとしたアリスに、我慢ならず首を直角に上げた。

アリスとは女性名だが、私を腕に抱く存在はれっきとした男だ。

しかも小柄なウサギの私と違い、優に180を超える筋骨隆々の彼に、これほど名前と見た目が会わない人間は見たもないと第一印象を抱いたのは、もういつのことだっただろうか。

不思議の国に迷い込んだ好奇心旺盛の少年は、年を経て青年となった今も、未だに時計ウサギを追いかけてくる。

普段はどこで生活してるのか知らないが、少なくとも我が城でないのは確かだ。

だとすると他には芋虫か、帽子屋か。

どちらにしてもあまり進んで会いたい手合いではないので、居所を確かめる気もなかった。

腰に腕を巻きつけて軽々と抱き上げると、長い耳に無遠慮に頬を摺り寄せるアリスに眉間に皺が寄る。

先ほども言ったとおり、私は分刻みのスケジュールで動くほど忙しいのだ。

敬愛する我が城の女王様の右腕として、忠実なる臣下としての職務がある。

こんな好奇心旺盛なだけの、見た目だけ成長した子供の相手をする暇はない。

空中でふらふらと投げ出されていた足に力を籠め、膝頭を思い切り蹴りつける。

一瞬束縛が強くなり、次の瞬間には硬い地面の上に着地した。そのまま自慢の脚力でぴょんと一飛びに距離を取ると、踵を基点に振り返る。

亜麻色の髪とブルーの瞳をした逆三角形の体型の青年は、格好よくはないがどこか愛嬌がある顔できょとりと瞬きを繰り返した。

じつと私を見詰めるアリスの眼差しは、彼がこちらの世界についてきたときから変わらない。

無駄に一途で盲目的なそれに柳眉を寄せて、重くて深いため息を吐き出した。

「いいですか、アリス。何度も申し上げますが、私は女王陛下の忠実な僕にして城の重鎮です。私の仕事はあなたが思う以上に重要なものであるからにして、今後は二度と邪魔をしないようお願いします」

もう何百回目になるか判らないだが、モノクルを指の腹で押し上げつつも一応忠告してみせる。

するとまじまじと自身より遥かに小さな身体をした私を見下ろして、にぱっと体格に合わせぬ無邪気な笑顔を浮かべた。

「うん、わかったよ！僕はウサギさんの邪魔はしない。約束するよ」

にここにこと頷いて気をつけの姿勢をした彼に、こくりと一つ頷く。
きつとこれも次に自分を見つけるまでの間だけ有効な仮初の口約束
なのだろうと理解しつつ、遅れたスケジュールを取り戻すために再
び私は走り出した。

私とアリス（後書き）

*ウサギ・・・身長145cm前後の小さなウサギ。髪の毛は真っ白で瞳は赤いが、耳と尻尾は真っ黒。常に時計を手放さず、幼い女王のためにとスケジュールを組んで分刻みで働く忠臣。見た目は小動物らしくお目目ぱっちり可愛らしいが、中身は若くして地位を得ただけあって結構な策略家でもある。敬愛する女王陛下が立派になれるまで支えることを人生の生き甲斐にしている。

*アリス・・・時計ウサギを見て好奇心に誘われるまま異世界に来てしまった少年。人見知りせずに、懐こい性格と憎めない性質からなんやかんやで身寄りのない世界でも普通に生活できている。大人の見た目に子供の性格を宿しているので、どうして自分がこんなに時計ウサギばかりを追いかけているか、理由は判って居ない。

*帽子屋・・・時計ウサギを気に入っている、皮肉屋で享樂家の男。本命はウサギだが、女性関係は割りとだらしない。自堕落で面白いことが好きなので、アリスのことも退屈しのぎには丁度良いと気に入っている。

*女王陛下・・・御年9歳になられたばかりの女王陛下。腹心であるウサギを誰よりも信賴して、姉のように慕っている。本当は大好きなウサギを常に独占していたいが、自分のために働いてくれていると知っている所以我儘は言わないよう我慢している。しかし十年後には色々な意味で『女王様』と呼ばれる逸材に変じ、思う存分独占よくを発揮する。

あたしと泉のストーカー

「あなたが落としたのは、金色の僕ですか」

「それとも銀色の私でしょうか」

「それとも銅色の俺か？」

「一切合財誰も落としてません」

運悪く蹴飛ばした石ころに反応した泉の精霊達が現れたのを見て、眉間に皺を刻むと心底嫌だと渋面を作る。

気にしたら負けだと商売道具の斧を木に向かって振り続け、無心になるべくリズムよく動いた。

額から労働の証の汗が流れ落ちて目に入るが、それを拭う暇さえ与えない。

ほんの少しの油断がいかなる結果をもたらすか、あたしは誰より身につまされている。

「ねえ、聞いてますか？」

「聞こえて無視しているんですよ、兄さん」

「無駄な抵抗だけど、その無駄な部分が可愛いんだよなー」

暢気な声にいらつときた。

斧の柄を握る手に力がこもり、血管の筋が浮き上がる。

それを見て、落ち着け、落ち着けと心の中で数字を数え始める。

「ほら、見て兄弟。あの脚線美。短いズボンから覗くすらりとした

足は本当に美しい」

「それよりも胸ですよ、胸。掌に握りこんでさらに余りそうな大きさに、艶と張り。私の理想です」

「俺は尻がいいと思うけどな。大きくて揉み応え有りそうだし、安産型だ」

ぶちり、と堪忍袋の緒が切れた。

一心不乱に木に向かって叩き付けていた斧を強く握り、右の踵を基点に身体を回転させる。

十分スピードの乗ったところで手を離れたそれは、きゅるきゅると回転しながら一直線に飛んでいった。

「失せろ、くされ妖精ども！」

しかし渾身の一撃は、残念ながら泉をアメンボのように移動した妖精どもにするりとかわされる。

『ド畜生！』と女にあるまじき叫びを上げ、地面に倒れ伏すと思い切り拳で叩いた。

この後の展開は良く知っている。

「さあさあ、大義名分が出来ましたよ。お仕事の時間です」

「はい兄さん」

「今日は俺からでもいいか？」

「いや、こういうものは年功序列と決まっている。兄さんから適役でしょう」

「うん。じゃあ、やるよ」

「くるんじゃない！」

「駄目だよ、僕たちも仕事だから」

につこりと輝かしい笑顔を浮かべた金髪の美青年は、あたしにむけて指を降ると瞬く間に移動させた。

「あなたが落としたのはこの金の斧ですか？」

「それともこの銀の斧ですか？」

「それとも、この銅の斧ですか？」

「——っ、何度も言うが、あたしが落としたのは鉄の斧！それ以外はいらない！」

「正直に答えたあなたには金の私、銀の次男、銅の三男、全て差し上げましょう」

「いらないよ！あたしが欲しいのは商売道具で、変態ストーカー野郎じゃない！」

全力の否定は中々伝わらず、泉の上から不思議の力を使い、持ち主を引き寄せる妖精たちに、鳥肌が立つ。

あたしは色々トラウマがあって美形は嫌いだ。

最近になってそれにストーカーと変態もプラスされた。

抗い難い力で踏ん張っても踏ん張っても縮まる距離に、どうしてこうなったと遠くを見る。

運命のあの日、新しい仕事場として選んだ先で木を切っていたあたしは、運悪く斧を近くの泉に落とした。

商売道具なのにと本気で落ち込んでいたところ、三人の泉の妖精が出てきてあたしに金の斧、銀の斧、銅の斧を見せてどれが持ち物か

聞かれ、正直に答えたところ、正直者には自分を差し上げますとにじり寄って来た。

変態の出現に、返してくれるつもりだったらしく現れた仕事用具の鉄の斧だけを手にとって逃げたのだが、何故か翌日もその泉に無意識に足を向けていた。

絶対に近付かないつもりだったのに、どうしてと呆然としてみると、蹴った石ころが泉に落ちてそれに反応した昨日の要請三人が現れた。

曰く『一目ぼれました。婿に貰ってください』とのこと。

絶対に認められるかと拒否したものの、気が付けば身体には呪いが掛かっていてこの泉近辺じゃなければ仕事が出来ないし、更にここに来たら石ころを蹴り飛ばして泉に合図すると言う呪詛もプラスされていた。

最悪だ。

元々美形は嫌いなのに、それに変態とストーカーを合わせればどうすればいいか判らない。

それでも食べていくためには働かないわけには行かず、毎日を色んな意味で必死に生きてる。

「あなたが欲しいのは金の僕ですか？」

「それとも銀の私ですか？」

「それとも銅の俺なのか？」

今日も泉の妖精三兄弟はすこぶるご機嫌でいらっしゃる。

落としてもいないのに勝手に所有物になろうとしている鬱陶しいやからを前に、痛みを訴える頭をどうすればいいのか、深々と眉間に

皺を刻んだ。

あたしと泉のストーカー（後書き）

*あたし・・・森できこりをしている肉体労働少女。実用的な筋肉に、小麦色の肌をした健康的で魅力的な体つきをしている。笑うと可愛いのだが、基本は渋い表情をしている。男世界で生きてきた所為か、結構勝気ですばいという性格。最近の悩みはストーカー変態の泉の妖精。

*金色の妖精・・・金髪碧眼の美青年。少し柔らかめな癖毛で、優しい王子様のイメージ。足フェチで自分好みの脚線美の主人公に一目ぼれ。この泉付近で仕事をすると言う呪いをさり気無くかけた。イケズな反応もクスクス笑って流すタイプ。

*銀の妖精・・・ストレートの銀髪と切れ長の瞳が冷たく見えるが、兄に負けず劣らずの綺麗系の美青年。ストイックな物腰と違い、胸が大好きで、理想の形と艶と張り、更に大きさを持つ主人公に一目ぼれ。泉に着いたら小石を蹴ると言う呪いを掛けたのは彼。

*銅の妖精・・・活発な性格で銅色の髪を短くした明るい活発系の美青年。彼の好みは尻で大きさ、張りともに理想であり揉み心地良さそうな主人公に一目ぼれ。危険がない限り毎日泉に来る呪いをかけたのは彼。

*幼馴染・・・主人公の幼馴染で村一番の美形で金持ち。貧乏できこり一家をしている主人公を幼い頃から虐め通し、彼女を美形苦手体質にした。しかし本音は子供の頃ありがちな、好きな子ほど苛めたくなると言うあれで、今では関係の修復に悩みながら毎日を過ごすも、長年の習慣がこちらにも身に染み付いていて、ツンデレにな

つている。

わたくしと七人の男の子と王子さま

朝日と共に小鳥が囀り、青々とした葉を茂らせる木々や、どこまでも見通せる透き通った湖がある森の深遠。

故意に辿り着こうとしても自然の迷路に惑わされるような、そんな場所に現在のわたくしは住んでいます。

以前住んでいた場所に比べれば遥かに狭くみすばらしいところですが、住めば都とは言うもので、初めは戸惑った料理や洗濯等の家事も、服の着替えも今では一人で出来るようになりました。

これも偏に同居人である七人の男の子たちのお陰でございます。特に赤い服を身につけた怒りっぽい彼と、にこやかに色々教えてくれる彼が居なければ今のわたくしはいませんでした。

元々何事も人任せにするのは好きではなく、幼い頃から自力で色々としてみたいと好奇心だけはあったものですし、意外と才能があったようで、今では料理も洗濯も彼らに誉められる腕前です。

お陰さまで城にいた頃のように滑らかな白い手は失いましたが、かさついた働き者の手も気に入っております。

この家にはわたくし以外にも七人の可愛い男の子達が住んでおります。いえ、むしろ彼らの家にわたくしが居候させていただいております。

この森は少々物騒な森ですので、わたくしは外出時には必ず彼らの内の誰かと共に出かけることにしております。

今日はグランビーさんとドクさんが果物を採りに行くのに一緒にしてくださるそうで、そろそろ仕事を切り上げたお二人が戻ってくる頃でしょう。

ぼんやりと考えながらテーブルを綺麗に拭いておりますと、前触れなく玄関——と言うよりは単なるドアに近いですけど——が思い切り激しい音を立てて壁に当たって床に落ちます。

元は一枚の木から出来ていたのですが、最早木片と呼んだほうが良いでしょう。

ぱらぱらと空から舞い落ちる木屑は、雪のように美しく、けれど吸い込むと噎せてしまえます。

さり気無く口元を押さえつつ距離を取ると、とんと背中になにか当たりました。

なんでしようと小首を傾げつつ振り替えれば、肩ほどまでしか身長がない、眼鏡と笑顔がトレードマークのドクさんの姿。

しかしその笑顔から心持ち無視できない迫力が滲み出ている気がして、わたくしは同じく笑顔を返しつつ体を強張らせました。

「おう、白雪！いつまでとろとろテーブル拭いてやがるんだ！？ふざけんなよ、このどん亀女が！」

背後からドクさんに支えられるようにして立っているわたくしに、いつの間に正面に居たのか、性格と同じで苛烈な赤髪のグランビーさんが眉を吊り上げて怒鳴ってらっしゃいます。

ドクさんと種類は違えど、こちらを整った顔をしているのに、いえ、だからこそ無駄に迫力があります。

慣れない当初は何度も身が竦み涙を零したのですが、一人で泣いている時にふと横を見るといつも林檎の差し入れがあり、それがグランビーさんからのものだとドクさんに教えていただいてから恐ろしさはなくなりました。

少し口は悪くて乱暴で乱雑で性格が過激ですが、グランビーさんはなんだかんだで鈍いわたくしを見捨てたりしないいい人です。

彼もドクさんと同じくわたくしの肩ほどまでの身長しかありませんが、それは他の男の子たちも共通で、何故かぴったり同じ大きさをされています。

理由はそうしないと色々都合が悪いからと仰っていましたが、わたくしは都合で身長の高さを変えられるとしたら凄いなと思います。ですが彼らでしたら一概にありえないと言い切れませんので、いつか見せてくださいませとドクさんにはお願いしてあります。

「グランビー、お雪さんはあなたが無駄に暴れるせいで出るゴミを片付けるので忙しいのです。私が手伝って扉だったものを片付ける間に、さつさと玄関を新調してきなさい」

「何で俺が！」

「あ・な・た・が壊したんでしょう？」

「っ……！クソ、俺は負けたわけじゃねえ！俺がいねえ間に白雪に何かしたら、ぶっ飛ばすぞ、腐れドク！」

つり上がり気味の瞳は、気のせいではなければ薄い膜が張っているように見えました。

しかしそれが零れ落ちる前に、グランビーさんは踵を返して森の中に戻っていかれます。

あつという間に見えなくなった姿は、流石に素早いものであります。消えていくグランビーさんを見送っていると、隣に並んだドクさんが仕方ないとばかりに首を竦めて仰いました。

「下品ですねえ、本当に。お雪さん、彼の言葉は左から右へと流してくださってよろしいですからね。グランビーが新しい玄関を調達している間に、私たちはさつさと木屑を片付けましょう。果物が沢山生えているいい場所を見つけたんです。今から行けば時間にも余裕がありますし、好きなものを選べますよ」

「はい」

いつも笑みの形に細められた瞳をつつすらと開けたドクさんに、コクリと一つ頷きます。

遠くからグランビーさんのものと思える雄叫びが響いて、今日も平和ですと思わず笑みが零れました。

わたくしと七人の男の子と王子さま（後書き）

*白雪・・・とある城の元お姫様。若干天然だが美貌は折り紙付き。その美貌ゆえに母に暗殺されそうになったところを、獵師に救われる。しかし置き去りにされた不思議の森がどんな不思議があってもおかしくない魑魅魍魎の住む森であることも、同居人の男の子達が実は成人男性で元暗殺者達というのも知らない、ギリギリのラインを上手く生きている運のいい子。

*グランビー・・・赤髪吊り目で口が悪い男の子。けれど白雪は過激な照れ屋と認識している。成人モードでは身長193cmで82kgの巨漢。ドクに言わせると子供モードの方が精神年齢に釣り合いが取れている、素直になれないお年頃の男の子。筋肉を活かした鈍器を操る。

*ドク・・・眼鏡の奥でいつも微笑んでいる男の子。成人モードでは身長175cmで中肉中背だが、年齢は最年長。マッドサイエンティストで実はもつとも怒らせてはいけない人の一人。白雪のことは『お雪さん』と呼び可愛がっている。いずれはお嫁さんにでもしようかと目論み中で、男の子たちから要注意とマークされている最中。

わたくしと七人の男の子と王子さま2

光を反射する小川のせせらぎを聞きながら、溢れんばかりの花を眺めるのは、とても目に優しい光景でございます。

しかしながら悪戯に命を摘むことはありません。

お城で暮らしている間から思っていました、花の命は短くて、切り落とした命はなお儚いものです。

わたくしは地面に根ざしている花を好きでしたが、母は豪華な花を部屋に飾るのを好みました。

様々な薫りが入り混じり、目にも痛い色彩の室内は最後まで慣れることはありませんでしたが、私が居なくなっても変わらないのでしょうか。

もう二度と足を踏み入れたくもありませんけれど、母の顔を思い浮かべれば懐かしさも感じます。

健気に太陽に向かって真っ白な花卉を開かせた花に指先を触れてみれば、シルクよりも滑らかな感触が伝わりました。

思わず微笑みが浮かんではまい、噛んでも殺しても止まりません。

この場にグランビーさんがいらしたら、とうに雷が落ちていたに違いありませんが、今日の私の同行者には怒声を上げる場面など想像出来ないスリーピーさんとドーピーさんしかいらっしやりませんので穏やかに時は過ぎていきます。

「ねえ白雪、ドクに頼まれていた植物はあ、これでよかったんだっけ？」

「はい、そうでございます。わたくしの記憶する特徴と酷似しておりますので、多分それで間違いはないかと存じます」

「白雪の記憶力はあ、ドクのお墨付きだもんね。ドクが知識においてえ、誰かを認めるなんて滅多にないしい、白雪がこれって言う

ならあ、これで決定だよ。ねえ、プー」

「zzzzzzzzzzzz」

プーとはドーピーさんがスリーピーさんにつけたあだ名にございます。

わたくし、始めはこの『プー』は、スリーピーさんの名前の最後の『ピー』の部分が訛ったからかと信じておりましたが、先日ドーピーさん本人から否定されました。

ドーピーさん曰く、この『プー』は、凄く大きい鼻ちようちんをぶーぷーしていたから『プー』なのだそうです。

わたくしはスリーピーさんとお会いしてから初めて鼻ちようちなるものを目にしましたが、確かにあれは名前につけたくなるほど見事なものでした。

同じ黒髪でも、くるりとした巻き髪のわたくしと違い、スリーピーさんの黒髪はすっとした真つ直ぐで艶やかなものです。

一本一本にキューティクルが行き届いておりまして、女として羨ましいほどでございます。

長い前髪でお顔が隠れてしまっておりますが、その下の素顔は綺麗と格好いいの狭間で揺れ動く麗しきご尊顔です。

美醜で言えば、ドーピーさんも負けておりません。

おっとりとした雰囲気似合う緩やかな天然パーマの前髪の部分をクリップで留めて、まろい頬を淡く染めつつお話しになる様子は、男の子にしか見えないのに可愛い一言です。

「プー、プー？起きてよお。お手伝いをちゃんとしないとお、夕飯はお預けなんだよお」

「zzzzzzzzzzzz」

「ねえつてばあ。グランビーが怒ってえ、僕たちのご飯も食べちゃうよお」

「zzzzzzzzzz」

眠るスリーピーさんに必死にドーピーさんが呼びかけるのですが、余程深い眠りに陥ってらっしゃるのか、一向に目覚める気配がございません。

わたくしが知る限り、彼は食事とトイレとお風呂以外で起きているためしがないのですが、ちゃんと仕事は出来ているのでしょうか。ドクさんが問題ないと仰っていたので問題はないと思うのですけれど、きびきび働いている姿が想像できなくて、思わず首を傾げるばかりです。

「白雪からもお、言つてよお。僕たちい、このままじゃあ、連帯責任なんだからあ」

間延びした口調ながらもどこか必死な眼差しに、わたくしは眠るスリーピーさんへと距離を詰めます。

花に埋もれて眠る姿は、とても絵になっております。ここにスケッチブックがございましたら、すぐに筆を執っていましたでしょう。

しかしわたくしにあるのは、ドクさんに手渡された筆のみで、絵を描きとめる術はございません。

仕方なく心のページに書き留めることにして、スリーピーさんの体に手を添えて軽く揺すりました。

「起きてくださいまし、スリーピーさん」

「……ん……朝？」

「いえ、もう夕方でございます。ドクさんのお仕事を早く終わらせ

ないと夕食に間に合いません」

「それって、・・・困る？」

「はい。お仕事が出来なければ、わたくしたちは三人ともご飯がいただけません。わたくし、お腹が空きましたし、残りはあと少しなので一緒に頑張りますよう」

「ん・・・わかった」

漸く目を覚ましたスリーピーさんは、のっそりと体を起こすと周りを見渡されました。

もう間もなくすれば、太陽は西日へと変わり空は茜色に染まるでしょう。

スリーピーさんに釣られて空を見上げていますと、ふと呆れ交じりの声が聞こえます。

「プーをお、こんなにあっさり動かせるのってえ、きっと白雪だけだねえ」

「ん・・・でもお互い様。俺が寝てる間、ドーピーは独占タイム」

「うん、そうだねえ。だから僕はあ、君と一緒に行動するの嫌いじゃないよあ」

「ん」

仲良く会話しながら手を動かす男の子達は、わたくしより余程頼りになるのに可愛く感じます。

彼らに負けないうちに頑張らなくてはと気合を入れて、わたくしも花畑に混じる植物を探しを再開いたしました。

わたくしと七人の男の子と王子サマ2（後書き）

*ドーピー・・・おっとりしてるようで、存外にちゃっかりしてる男の子。顔は普通に男の子なのだが、どこか雰囲気可愛く、本人もそれを意識している。成人男性になれば178cmと意外と長身で、口調と裏腹に機敏な体技を得意とする。

*スリーピー・・・黒髪黒目で一日のほとんどを眠っている。一度寝ると滅多に起きず、隣でグランビーが怒鳴るくらいでは駄目。ドクが薬を使って人体実験をしようとしたら起きるが、逆に言えばそれくらい危機的状況でなければ眠り続ける。例外として白雪から起こされると、何故かすんなりと目覚めれるらしい。成人モードでは178cm。二挺銃の使い手。

わたくしと七人の男の子と王子さま3

トントントンと最初よりはリズムカルになった包丁の音が響きます。まな板の上に置かれた食材は、畑で育てた野菜にございます。

玉葱と人参とじゃがいもを使い、ことごとシチューを作るのですが、野菜の煮込み時間を長くしてじゃがいもがとける位がわたくしの好みです。

畑の野菜は収穫しても翌日にはまた生えているので、毎日好きな食材を選べます。

森に生えている木の実も同じですし、わたくしが本で読んだ世界より世の中はとても便利でございます。

「しろちゃん、しろちゃん。そっちはどう？」

「はい、こちらは万全に作業を進めております。そちらは如何ですか、ハッピーさん」

「僕のほうもきっちり進んでるよ！うん、幸せえ」

男の子の中でも一番幼い顔立ちのハッピーさんは、円らな瞳を細めてほにやりと微笑みました。

ふわふわの癖毛と女の子のように愛らしい顔立ちに、白くて細い腕や足が強調されるオーバオールは彼にとっても似合っております。前髪をリボンで結んでいらっしやるのですが、それがまたコケティッシュで可愛らしいです。

グランビーさんは女男と言ってよく喧嘩を吹っかけているのですが、中間はドクさんやドーピーさんが話しかけてきてくださるためにいつも見れなくて、気がつけばグランビーさんは床の上で寝ていらっしやいます。

風邪を引くといけなかったのでベッドまでお運びしようかと思いました
が、固い床の上が好きだとみなさんから教えていただけで、今では
床の上で眠っているときには毛布を掛けて差し上げるようにしてお
ります。

たまに背中に複数の足跡がついているのを見受けますが、トイレに
行く途中で不可抗力で当たってしまうらしいのです。

時折トイレと正反対の場所で寝ているのにも関わらず足跡がついて
おりますが、きっとみなさん子供なので寝ぼけてしまうのでしょう
ね。

床で寝た翌朝の起床時にはグランビーさんの気分はかなり苛立つて
おりますが、ぐっすり寝た後にも拘らずあの状況なので、もしかし
て悪夢を見ているのではないかと心配になります。

今日お帰りになってから確認をとることにしましょうと心に決めて、
もう一人お手伝いをしてくださる方に視線を向けました。

「バッシユフルさんは如何ですか？何かお手伝いしましょうか？」

「ふん。君なんかに手伝いされたくないし。どうせ仕事が遅いんだ
から、自分の仕事だけさっさとやれば、馬鹿！」

「はい。差し出がましいことを申し上げまして、すみませんでした」

「前みたいに怪我したりとかしないですよ。トマトを入れてないのに
赤いシチューなんて、僕は嫌だからね！」

「通訳すると、怪我が心配だから気をつけてね、だって！バッシユ
はしろちゃんが怪我したら一番大慌てだもんね」

「余計なこと言わずに黙っててよ、幸せ馬鹿！」

にこにこと愛らしい笑顔を浮かべて指を立てたハッピーさんの、襟
首を両手で掴んだバッシユフルさんは、切れ上がった眦を鋭く細め
て紫紺色の瞳を剣呑に光らせました。

ドクさんやスリーピーさんとはまた違った雰囲気綺麗な顔立ちですが、片目を長く伸ばした前髪で隠したバツシユフルさんは、迫力美人という言葉が似合いそうです。

さらさらの薄紫の髪を襟足を越えるくらいのショートカットにされて、所作も一つ一つが品がございます。

言葉遣いだけは少し荒々しいですが、慣れてしまえばグランビーさんと同じくらい表現が個性的なだけで、とてもお優しいです。

以前料理で怪我したときも、『馬鹿なんじゃないの!?!』、『どうしてこんなことが出来ないの!?!』などとお怒りでしたが、手当てをする手つきはとても労わりに満ちているものでした。

指先をほんの少し切っただけでしたのでお手伝いを続けようとしたのですが、『そんな重傷で動く気なの!?!僕が代わってあげるからさっさと目障りな傷を治してよね!女の子なんだから、少しは気にしなよ!』と、とても心配していただきました。

料理は毎日のわたくしの仕事ですのに、傷が完全に消えるまでの一週間の間朝昼晩と当番を代わってくださって、言葉など必要ないくらい大切にしてくださります。

「あはは!今日もバツシユは元気で、しろちゃんも可愛くて、二人と一緒に僕幸せ」

「うるさい、黙れ!もう余計なこと言うな!」

「どうして?僕はバツシユがツンデレでも大好きだよ」

「大好きって言うな、馬鹿!」

「ふふふふ」

ハッピーさんの言葉に顔を真っ赤に染め上げたバツシユフルさんはとても可愛くて、胸の奥から温かい何かが込み上げます。

素直に頷かないだけで、バツシユフルさんは決してハッピーさんの

言葉を嫌悪してるわけではございません。

毎日こうしたやりとりをなさるお二人ですが、慣れてしまっほとんど一緒に行動されてます。

少しだけ個性的な好意の表現をなさるバツシユフルさんを、ハッピーさんは大好きです。

そして毎日後について回るハッピーさんを、バツシユフルさんも大好きなのです。

がつくんがつくんと首を揺さぶられながらこちらを見たハッピーさんが、悪戯っぽい笑みを浮かべてウィンクしたのは、きつと口にしていない方がよろしいのでしょうか。

『美味しくなってくださいませ』と、ハッピーさんに教えていただいた魔法の呪文を唱えながら、シチューの鍋をかき混ぜます。

みなさんがお帰りになる頃には、このシチューは特別に美味しく仕上がっていることでしょう。

わたくしと七人の男の子と王子サマ3（後書き）

*ハッピー・・・いつも笑顔で朗らかな空気の男の子。顔立ちは女の子と見紛う程愛くるしいが、にこにこしたままだぎついことも平気でやらかす。善悪の境目が曖昧で、グランビーが強制的な眠りに落とされる八割は彼の仕業だったりする。バツシュフルに懐いている。成人モードでは身長172cmで、ワイヤーソーや暗器を得意とする。

*バツシュフル・・・口は悪いが意外と優しいツンデレな男の子。つり上がり気味な瞳や尖った雰囲気のお陰できつく見えるが、実際はハッピーの行為を止めるストッパー役となってる場合が多い。ナイフや弓などの武器を扱う。成人モードでは175cm。

わたくしと七人の男の子と王子さま4

「さあ、今日こそ俺の人形になってもらおうか、白雪！」

『ふははははー』と腰に手を当てて天を仰ぎながら王子様らしくない高笑いをされた方は、隣国の王子でございます。

わたくしの住まう国と比較にならぬほど、貿易の栄えた世界に名だたる大国の第三王子でいらっしゃるのですが、魔法に関しては最先端をゆく我が国に幼少のみぎりから幾度となくご遊学されておりました。

そのご縁でわたくしが五歳の頃からお付き合いがあります。

国を出て国境にある『不思議の森』に住むわたくしは、姫の地位など失くしたに等しいのに、未だにこうして顔を見せてくださる優しいお方です。

きつく見える一重の瞳は青玉のより尚鮮烈に輝いて、太陽を紡いだような金髪はわたくしの癖の強い髪と違いずっと真っ直ぐに伸びております。

身長は高くわたくしの国にご遊学されるほどの魔法の腕前は言うまでもなく、凄まじい剣の使い手でいらっしゃると耳にしたこともございます。

文武に優れて智勇兼備と名高い王子ですが、感情の表現が少しだけ独特ですので、隣国の姫というだけの、しいて言えば幼馴染と言えるか言えないか程度の付き合いのわたくし以外には友人はいらっしゃらないそうです。

これはわたくしが調査したのではなく、ご本人からの申告でございます。

一度お忍びと称して無理矢理街に連れて行かれたことがございますが、酒場という不思議なお食事処でお酒を召した王子がぼろりと口

にした内容です。

あれは確かもう二年ほど前になりますので、わたくしが十五の時でしょうか。

当時は散々叱られましたが、今となれば懐かしくも面映い思い出でございます。

「聞いているのか、白雪！俺は貴様に申しているのだぞ！」

白馬に跨った王子の姿は、国中の画家がこぞって絵におさめなくなるほど麗しいモチーフでしょう。

機嫌を損ねて柳眉を顰めた姿すら、普通の女性ならばうつとりするのでしょうが、わたくしは昔から王子を存じ上げておりますので、見た目に胸をときめかすこともございません。

隣国の第三王子といえば、彼の姿を一目見た乙女は恋に落ち、そのクール過ぎる性格に滂沱の涙を零すと言われておりますが、恋を意識する前の子供の時分からお会いしていれば、全てにおいて慣れてしまいました。

飛び抜けた美貌にも天賦の才にも、それを磨く努力する姿に突拍子もない性格や、少しばかり偏った趣味や実は極度の人間嫌いというのにも、本当は人にも国にも興味を得ていないことも存じ上げております。

全てをひっくるめて大切な幼馴染の『俺の人形になれ』発言も、初対面の頃から顔を合わせば口にされ続け、顔を合わせていない間もマメに頂く手紙の締めの一文としてあれば、慣れてしまうというものでございます。

わたくし以外に何人ご存知かわからないですが、王子は実は極度の人嫌いでございます。

物言わぬ器が良いと求める精巧な人形のコレクションは、わたくしと出会った当初にも相当数ございました。

数あるお見合い話も全て拒絶していらつしゃるとも耳にしましたし、今でも結婚される気はないのでしょうか。

それにも関わらず意に添わぬ縁談を無理矢理に押し付けられ、状況が悪化したのだと思います。

国境などという危うい場所に住まうわたくしに会いに来られるほどに、ストレスが溜まっておいでなのでしょう。

「・・・しらゆき・・・だれ？」

バツシフルさんに作っていただいたワンピースの裾を引っ張つられたのは、スニージーさんです。

スニージーさんはわたくしが居候させていただく家の男の子の中でも、無口な方でいらつしゃいます。

肩を越す程度の緋色の髪を短く一本に結び、新緑の瞳は常にうるうると潤んで、まろい頬には顔半分を覆うマスクが占拠しております。素顔は可愛らしいのですが、お花が大好きな花粉症体質らしく、真っ赤な目を小さな手の甲で擦ったり、くしゅんくしゅんとクシャミをする姿がよく見受けられます。

ドクさんに薬を処方して頂いているようですが、中々利き難いそうで、苦しげにしているスニージーさんが少しでも楽になるよう、お花の花粉を振りまく部分だけ抜いてお渡しする内に、気が付けばとても懐いていただきました。

仕事がない間は、スニージーさんが一番わたくしの傍にいらつしゃる気がします。

ぴったりと寄り添う緋色の髪をくしゃりと撫でて差し上げますと、嬉しそうに大きな瞳が眇められました。

こちらまで胸が温くなるような愛らしさに、つられて微笑みを浮かべますと、王子にもう一度名前を呼ばれました。気のせいかな最初よりも一層鋭い声音でいらっしゃいます。

「そいつは誰だ！この間の男とはまた別の男だな！？」

「こちらはスニージーさんと仰ります。わたくしの居候するお家の家主さんの内の一人でいらっしゃいます」

「家主さんの内の一人！？ちょっと待て、白雪、貴様が居候している家の家主は先日の生意気なクソガキだけじゃないのか！？」

「いいえ、違います。グランビーさん以外にも、ドクさん、ハッピーさん、スリーピーさん、バッシュフルさん、ドーピーさん、スニージーさんと併せて七人の男の子達が家主でございます」

「！！！！？」

王子の綺麗な瞳が見開かれ、瞳孔がきゅっと丸くなりました。

数年に一度お目に掛かるかどうかの不吉な前兆に、わたくしは思わずワンピースの裾を握るスニージーさんの掌を手で包みます。

王子がお怒りになることは滅多にないのですが、本気で激怒されるときとても怖いのです。

確か以前に本気でお怒りになられたのは、わたくしが誘拐犯にお菓子を貰ってついて行ってしまったときです。

本当にニコニコした笑顔の優しいおじさんでしたが、お菓子を一口口にして、気が付けば暗い馬車に縄で縛られて転がされておりました。

助けてくださったのは、お母様でも、国の騎士でもなく、他国の王子であるこの方でした。

とりあえず安全な地まで連れて行かれた後に懇々と何時間も説教されて、本当に心に響いたものです。

今ではわたくしも知らない人からの頂き物は口にしないと心に決めておりました、先日も親切にりんごを配り歩いていらっしやるおばあさんの厚意をお断りいたしました。

お年寄りのご厚意を無にするのは心苦しかったのですけれど、王子とのお約束を破るわけにも参りません。

その後おばあさんは何やら色々と仰ってお見えでしたが、わたくしには早口すぎて何を仰っていらしたか聞き取れませんでした。

あれから姿を見ておりませんけれど、あの優しいおばあさんに幸が多い事を祈るばかりです。

「・・・聞いているのか、白雪！」

「はい、聞いております！」

気が付けば至近距離に合った青い瞳にびっくりと身体を強張らせれば、いつの間にか繋いでいた小さな掌に力が籠った気がしました。

強く握り締めてしまったのかと心配になり、顔を下に向けますと、大きな瞳を吊り上げたスニージーさんがわたくしを庇うように王子との間に入られました。

王子との身長は40cmは下らないでしょうに、毅然と顎を上げて真っ直ぐに瞳を睨み据える姿はとても凛々しいです。

わたくしはわたくし以外でこうして真っ直ぐに王子の目を見た人など、初めてでございます。

王子も僅かに瞳を見開かれていることから、驚いていらっしやるのが伝わりました。

「・・・しらゆき、いじめるなら、・・・おれ、おまえ、キライ」

ぽつりぽつりと途切れつつ、物騒な言葉が赤い唇から零れ落ちました。

スニージーさんからそのように好戦的な台詞を聞くとは思わなかったので、わたくしは一瞬息が止まりました。

そしてゆっくりと視線を王子へと上げて参ります。

王子はそのお立場から自分の敵になると決めた相手には、大層お厳しい方です。

子供が相手だとしても、ご容赦いただくのは難しいと思います。にいつと緩やかに持ち上がった口角や、剣呑に顰められた瞳がその証拠でございます。

明らかにスニージーさんを敵として認定した王子を前に、わたくしはスニージーさんを腕に抱きこみました。

グランビーさんでしたらご自分で何とかしてくださいそうですが、大人しいスニージーさんを王子の前に晒したままでは出来なかったのです。

「庇うのか、白雪」

「——相手は子供でございます。どうぞお慈悲を下さいまし」

「なら、俺の人形になるか？」

「それとこれとは別問題です。わたくしには意思があり、お人形さんにはなれません。それにわたくしを人形にしても、鑑賞に耐える出来栄にはなりません」

「そんなことはっ」

「・・・そんなこと、ない。・・・しらゆき、おれの、しるなかでいちばんきれい。きれいな、おんなのこ。・・・おれ、やさしい、しらゆきすき」

王子の言葉を遮るように、スニージーさんがとても優しい言葉を掛けてくださいました。

お世辞だとしても、とても嬉しい一言です。

淡く目尻を染め上げて、ふんわりと花開くような微笑みを浮かべられたスニージーさんの頭を思わず撫でておりますと、かちやりと金属が震える音が致しました。

「・・・やはり貴様はここで消す」

「・・・うるさい。おまえ、いなくなる。しらゆき、おれの」

澄み渡る青空に燦々と降り注ぐ柔らかな日差し。

お天気はとても良いはずなのに、雷鳴が轟く音が聞こえた気が致しました。

結局恐れるような暴力的な展開にはならなかったものの、鳥肌が立つ舌戦たるや恐ろしいもので、王子の舌鋒が鋭ければ、スニージーさんは淡々と的確に急所を突いていらつしやりました。

昼食の時間を過ぎても家に戻らなかったわたくしたちを、ドクさんたちが迎えに来てくださらなければ、今尚外で舌戦が繰り広げられていたでしょう。

場所を男の子達の家に移しても続けられている口喧嘩はBGMにするには大きいのですが、それでもわたくし以外の前では表情一つ崩さなかった王子のリラックスした態度に、思わず顔が綻びます。

「貴様らそこになおれ！俺が叩き切つてやる！」

「・・・おまえじゃ、むり。・・・おれの、ほうが・・・つよいから・・・」

唯一つ難を申し上げますならば。
ご交友を深めるのはよろしいですが、次はお食事時は止めて頂
きたいものでございます。

わたくしと七人の男の子と王子サマ4（後書き）

*スニージー・・・緋色の髪に緑の瞳の、どこかぼんやりした雰囲気の子。綺麗で可愛いからという理由で花が好きだが、本人は花粉症ゆえに常にマスクが標準装備。ぽつぽつと意見を述べ喜怒哀楽が少なそうに見えるが、物言いは到ってストレート。成人モードでは180cm。特技は魔法で、中でも世界唯一の創造魔法を扱える大魔術師。

*王子・・・隣国の第三王子で白雪にとっては幼馴染兼兄貴分。しかし王子からすれば白雪は初恋の相手進行形。物心ついた頃から上辺だけへつらう相手に辟易し、感情を持たぬ美しい人形を集めることにのめり込んだ。唯一態度を変えなかった白雪にだけは特別な感情を抱いており、彼の言葉である『俺の人形になれ』は最上級の口説き文句・・・のつもり。

自分と美麗な白鳥と三つ子のアヒル

自分は、とある湖の辺に住む有翼人だ。羽は村でも有数の大きさを誇り、身長も女にしては高い。

同族の男に紛れれば目立たないのだが、隣家に住む幼馴染達は似て非なる種族なので、昔から自分より身長が低く、自分は長身なのだと長年思い込んでいた。

それが思い込みと知ったのは、反対隣に同族の男性が越してきてからで、彼に比べれば、自分は十センチ以上低く、どうやら平均程度らしい。

自分の白い髪を撫でながら微笑む麗人は、男にしておくには勿体無いほどの美しさを持っている。

男女として呼び名が高く、淡泊な性格と顔立ち、メリハリのない体つきから女性にしかもてない自分より遥かに美人だ。

そんな彼と比べても遥かに無骨な印象を持つ自分は、何故か今日も因縁をつけられていた。

「白^{はく}の男女ー！」

「お前、女なんて嘘だろ！胸もお尻もぺったんこじゃねえか！」

「女のハーレム築いて満足か？お前、そっちの気があるんじゃないの!?」

お隣の三つ子のアヒルの有翼人の三人は、もう日常と化した罵声を浴びせかける。

いや、罵声と言うにも稚拙だ。小さな子供の頃ならともかく、今更悲しむこともない。

幼い頃この村に引っ越してきたばかりの頃は、いきなり因縁を吹っ

かけられたのに驚き、仲良くなれないのを悲しんだ時期もあったが、その分何故か懷かれた女子達に庇ってもらい親しくなれたのでプラスマイナスゼロだった。

ボキヤブラリーが少ない彼らの悪口なんて何年経っても成長しないものばかりだし、右から左に受け流す術を覚えれば無視するのも容易だ。

肩を越すあたりで短く切りそろえられた髪をさらりと揺らし、ふんと鼻を鳴らして嘲りの表情を浮かべる。

腕を組んで背中にある木に体を凭せ掛けても彼らとの身長差は十センチは硬いので、上から見下ろしてやった。

「今度はどんな用件だ？アールの想い人が自分を好きになったのか？それとも、ヒスイの想い人か？いや、ルキナの想い人か？」

『っ！?』

三人揃って瞬時に顔を染め上げる。

恥辱か怒りによるものか判断付かないが、大方予想は当たっているのだろう。

どうやら中性的な美貌とやらを持っているらしい自分は、今までも何度か女性に告白をされている。

断つても気まづくなったことはないのではんの軽い憧れからだと思うのだが、村の年頃の女性に囲まれている自分が酷く面白くないらしい。

正直女性にどれだけモーションを掛けられたとしても、自分は靡く気はない。

同性を好む人を否定する気はないが、到ってノーマルな嗜好をしている。

ちゃんといつでも嫁にいけるよう、料理、洗濯、裁縫などの家事は

完璧だし、運動神経は悪くないが、戦いに秀でてるわけでもなく、性格的には女らしい方だと思う。

ただ言葉遣いが少し素っ気無いだけで女性の自覚は在るし、『好きな女を取られた』なんて言いがかりもいいところだ。

自分から言わせて貰えば、そんなのは彼らの魅力不足でしかない。しかしながら実際に口にしたとき、いつもなら三人で喧々と煩いはずの彼らが本気で凹んでしまったので、それからは一応言わないようにしている。

凹むくらいなら己の魅力を磨けと未だに思っているけれど、幼馴染としての気遣いと言うものだ。

長いと称される足を組んで黙り込んだ彼らを観察していると、不意に斜め後ろから腕を引かれた。

予想外のタイミングにバランスを崩しかけ、とん、と背中に硬い何かが当たる。

「——麗さん」
うるい

「ふふふ、私とのお茶会にいつまでも姿を見せてくだらないと思つたら、こんなところで時間を潰していらしたのですね」

「ああ、もう約束の時間を過ぎていましたか？すみません」

「いいえ、待つのも楽しみの一つですから。ただ、私が我慢できずにあなたを迎えに来ただけのことです」

名は体を現すをそのまま表現した彼は、両親以外で唯一自分より身長が高い相手だ。

混じり気ない白の自分の髪と違い、銀が混じった不思議な髪色をした彼は、腰まで伸ばしたのをゆつたりと結わえていた。

数年前に越してきて、あまりに田舎の言葉が似合わない彼に気後れしたが、白鳥として同族であるし、意外と気さくな性格だったので

すぐに親しくなれた。

男なのに綺麗という言葉が似合う存在は、彼しか知らない。

いつまで見ていても飽きないくらい美人だが、それでも骨格や節くれだった掌などは男のもので、今だって自分が体を預けてもビクリともしない包容力を持っていた。

気が付けば腰に腕を回し、肩に顎を乗せた麗さんは、綺麗な黒の瞳を柔らかく細める。

「——誰かと思ったら、村に住む女男じゃねえか」

「相変わらずなよっちな。性別も年齢も不詳で気持ち悪いんだよ」

「ああ、でも白と並べばお似合いかもな。男女に女男。逆転カップルの出来上がりだ」

さつきよりもずっと悪意のある言葉の羅列に、眉間に皺が寄った。

アヒルの三つ子は口は悪いが心底から相手を侮蔑するような言葉は言わない。

子供みたいな稚拙な悪口を繰り返すだけの、意地の悪い幼馴染だ。だが、いつからだったろうか。

彼らの態度は麗さんが一緒にいると激化して悪くなる。

瞳に移る色は紛れもない嫌悪だ。麗さんが彼らに何かしたとは思えないが、苛立ちを押さえ切れないでいた。

しかし今の麗さんは、三つ子の言葉などどこ吹く風だ。

「おやおや、嬉しい限りですね。私と白さんがお似合いだななんて。これほど美しく魅力的な女性と噂されるなど、私としても願ったりです。——いっそ、本物にしてしまいたいしょうか」

「っ、う、麗さん!？」

「ふふふふ」

女の自分も見惚れんばかりのうつとりする麗しい微笑みを浮かべた彼に、反射的に顔に血が上る。

冗談だと判っているのだが、冗談に聞こえないのが性質が悪い。

時折思うが、彼は凄く多くの女性を泣かせてきたのではないだろうか。

こんなに甘ったるい空気で優しくされれば、落ちない女なんていない気がする。

「白がお前の嫁になるわけないだろ！」

「適当なこと言ってるじゃねえよ、バーカ！」

「白はお前なんか好きじゃねえよ！」

「——でも君たちを好きなわけでもありませんよね。君たちがお馬鹿さんなお陰で、私はとても幸せです。何年もあるアドバンテージを全然活かせていないのですから、立ち位置は同じですものね。・ああ、同じではありませんか。あなたたちはこういうお子様で、こういう接触もままならないですし。ずっと可愛い子供のままでいてくださいね」

にこにこにこり。

そんな擬音がつきそうな笑顔を浮かべた麗さんに、三つ子は言葉を詰まらせた後踵を返した。

「つ、次は絶対に負けねえからな！」

「お茶会だって邪魔してやる！」

「二人きりになんてさせないんだからな!!」

完全に負け犬の遠吠えだ。

しかも何に対して遠吠えしてるのかまったく判らない。

唐突に去って行った元いじめっ子三人組を見送っていると、くすくすと小さな笑い声が降って来た。

「・・・あの、もうこの体勢はいいかと思うのですが」

「どうしてです？私に抱きしめられるのは嫌ですか？」

「いやとか云々以前に、適切な距離ではないでしょう。自分と二人の時はこんなことしないのに、どうして彼らがいるとこうなんですか？」

「———そうですねえ、年甲斐がないとは私も思ってるのですよ？けれど、牽制したくなってしまうんです」

「牽制、ですか？」

「ええ。こうして言葉を告げても意味を理解しない幼いあなただからこそ、今の内に色々と刷り込みをしておきたいんですよ」

そうして瞳を細めた麗さんは、やはりとても美人さんだ。

彼の言葉が意味深であるのは判るのに、理解は出来そうになくて情けなく眉が下がる。

そんな自分に艶やかな微笑みを浮かべた彼は、苦しそうでありながら、何故か満足そうだった。

自分と美麗な白鳥と三つ子のアヒル（後書き）

* 白・・・白鳥の女の子。そのため、アヒルの村では長身。しかし同族の麗から言わせると、平均で華奢な少女。襟足が長いショートカットで、端整で中性的な顔立ちと淡白でありながらさり気無く優しい性格で村の少女から絶対的な支持を受けている。美少年に見える外見とは反して、趣味は女の子らしい。村の男性は概ね自分より身長が低いのがコンプレックスだったので、子供の頃はそれを無駄に刺激した三つ子が苦手だった。

* 麗・・・実は都落ちした元貴族。お金は余ってるので、働く必要は全くない余生を送る。しかしそれだと不自然なので、村では都で専攻していた知識で薬剤師として働いている。腕と顔で人気の売れっ子。貴族の女性に嫌気が差して女性恐怖症になりかけていたが、飾らない白に心惹かれて現在では自らべったりしている。名前どおり真っ白な彼女に色をつけるのが密かな目論見。

* アール、ヒスイ、ルキナ・・・素直じゃない三つ子のアヒル。幼い頃引越してきた白に一目惚れするも、好きな子が自分より長身であるのに素直になれなくて苛め倒してきた。しかし自分たち以外の誰かが白を苛めようとしたら真っ先に庇うため、白との仲も、いじめっ子の割りに悪くない。素直になれないまま思春期に突入し、気が付けば白の傍をゲットしていた麗に日々焦る毎日である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2433y/>

ちょっとだけ違う御伽噺

2012年1月5日01時52分発行